

家族文化と

現代中国の社会発展

張 琢

序

伝統文化とは、後の世代を育むと同時に束縛するものである。

伝統的な農業社会が現代産業社会へと向かうプロセスのなかで、社会文化はいかにして新たな転換を遂げるのだろうか。改革開放以後、農村の発展主体としての中国農民は、まさに自らの実践のなかで活き活きとした創造をすすめている。

本論文は実証研究を手がかりとして、社会経済・政治・文化に体现された、四つの二重構造とその矛盾した関係性に対して、中国農民が実際の生活のなかでどのような処理を



しているかを分析した。その矛盾とは、

- ① 伝統的な小家庭の農業・手工業の相補完了したミクロな自給自足と、国家という地大物博のマクロな自給自足が共同で構成している二重の自給自足
 - ② 何千年もの君主専制において形成された保守の伝統と、数十年の共産党政権下で注入された革命伝統との衝突と交流
 - ③ 中国固有の文化と外来文化、とりわけヨーロッパ文化との交渉と融合
 - ④ 民族化と現代化との弁証法的な統一
- である。本論文から得られるのは、中国農民が社会实践において自らの創造により、こうした問題に与えた回答の初歩的で、しかも最新の情報である。

一 農業文明にもつづいた家族文化

東アジアの地理範囲と東アジアの経済地図・文化地域は、厳密に分類すれば若干の異同があるもの、おおむね一致している。全体としてみれば、地理環境が経済区分を決定し、さらには異なる地理環境と生産方式がまた、ある文化形態——生活方式、風俗習慣、観念体系から文化心理にいたるまでの——を育成してきたのである。

われわれのいう東アジアの伝統文化とは、おもに東アジアの悠久の農耕経済生活にもつづいている。それは歴史発展のなかで不断に蓄積され、後の各世代の思想を育み、これらの血液に流れこんできたと同時に、ある思想行動モデル・規範を形成して、後の世代の精神を支えると同時に束縛してきたのである。

人間は自然の子である。猿から人間にいたる進化は、約三千年前のヒマラヤ山脈の活動から始まった。古人類学者は一般には、猿から人間にいたる発展が五つの段階を経過したとしている。すなわち、ラマ古猿人、南方古猿人（早期直立人）、直立人（晚期直立人）、旧人（早期ホモ・サピエンス）、新人（晚期ホモ・サピエンス）である。ますます豊富になる考古学の発見による遺跡の証明するところは、東アジアにあって、この五つの段階は連続として途切

れることなく今にいたっているのである。

これまでずっと、人類の農業文明の発端は金属器の発明後であり、西アジアのチグリス・ユーフラテス河流域と東北アフリカのエジプトに始まるとされてきた。ところが、中国の絶えざる考古学の新発見によれば——とくに八〇年代以来の新発見によって生まれた共通の認識によれば、水稻栽培はすでに九千年あまりの歴史を有しており、近年、中国湖南省で発見された最初期の栽培種もみは、今を隔たること一万八千年から二万二千年のものである。そのころ、現在の日本列島や南洋群島はまだ東アジア大陸と分離してはいなかった。ではなぜ金属器の発明以前に、これほど長いあいだ水稻栽培の歴史が存在していたのか。私の考えでは、水稻栽培は水田のなかでおこなわれ、泥土が水分を含んで柔らかくなっており、木石の工具でも十分に耕作が可能であったためであろう。こうした一万年の長さを持つ水稻耕作こそ、東アジアの伝統文明の基礎になったものである。もちろん、水稻耕作以外にも、灌漑作物を含む、ますます豊穰化する多様な作物栽培がこれ以後も存在した。

定住農耕生活において、人びとは地縁・血縁の社会集落を世代ごとに相継いで形成していった。金属器と農耕牧畜の発明や実施が広まるにつれて、小家庭が生産の基本単位、社会の初級組織となっていくた。

こうした小家庭と、これら小家庭が不断に繁栄すること

を保証する分家制度の成立は、法律形式によるその確認と強化とならんで、中国においては、紀元前四世紀の商鞅の變法（井田制の廃止、土地売買の許可。成年男子から租税を徴収する方法の創設、一族に二人の成年男子がいるときは必ず分家すべきで、さもなくば倍額を課税するという規定）を指標とすることができる。

経済生活において、小家庭のメンバーである老若男女は、生産労働と生活労働、家庭外労働と家庭内労働、主要労働と補助労働、農業労働と手工業労働を緊密にむすびつけて、家庭メンバーの機能を最大限に發揮・協調させ、最大限に時間を活用し、原材料を節約し、コストを低下することができた。中国の伝統農業は、千百年のあいだ發展してきた高度に集約化した密度ある農耕として、まさにこうした小家庭を単位に担われてきた。そうした小家庭による農業自然経済の社会細胞を維持するために、一連の完備した倫理道徳と觀念体系がつくられ、父子・夫婦・兄弟姉妹やその他の親族関係は、それによって規範化され処理された。生産・生活・教育・防衛や娯楽といった社会機能を一体として兼ね備えた小家庭において、血液が水よりも濃い家庭関係と情感が養成された。これこそ、オリエントの集団精神における、社会経済や倫理道徳、情感のミクロな基礎にはかならない。あらゆる家庭がこうした集団精神の基本単位なのだ。

農業生産の水土などの条件への依存や作物成長周期の安定性によって、農業民族の土地防衛と移動重視の習性がかたちづくられた。農業の生産需要に適應するためには、水利耕作を勃興させねばならない。とくに北方と西北の精悍な騎馬民族の不断の南方侵略と東方進出を阻止するためには、マクロレベルにおいて、組織化の度あいを日々向上させた膨大な国家機構を樹立して、社会の管理、農業生産の發展、国内鎮圧と国外防衛の職能を行使しなければならぬ。中国の南北を貫く大運河と、東西を横断する万里の長城は、中国の農業文明時代が中央集権政府による社会力量の統合を完成させたことを代表し、象徴する二つの傑作である。それは小家庭を基礎単位とするミクロな集団精神を土台に、マクロな集団精神を拡散させたことの表れなのである。

社会の現代化發展の研究において、民族国家と民族意識の形成が、現代化を起動させる前提条件であるとする論は数多い。さらに、それは資本主義の成立にともなうて勃興したものであるとも考えられている。ヨーロッパはこうした民族国家を最初に成立させたがゆえに、第一に現代化の發展の道をたどったのである。だが、そうしたヨーロッパの歴史基準によって、オリエントの悠久の文明史を考察する粗雑な観点は、オリエントの社会發展の實際を正確に描写し解釈できるものではない。

民報第壹號目次

● 圖 畫

○世界第一之民族主義大偉人黃帝○世界第一之
民權主義大家盧梭○世界第一之共和國建設者華
盛頓○世界第一之平等博愛主義大家墨爾根

● 發刊詞

孫 文

● 民族的國民

精 衛

● 論滿政府雖欲立憲而不能

翁 仲

● 論中國宜改創民主政體

思 黃

● 中國革命史論

思 黃

● 第一章緒論○第二章秦末之革命

吳 武

● 譯 載

君 武

● 來 稿

君 武

● 告 白

君 武

○致公堂重訂新章要義(雲金也)○周啓然傳(上
海)○周啓辛(鍾事略(湖南))

● 記東京留學生歡迎孫君逸仙事

過 庭

● 記戊戌庚子死事諸人紀念會中廣東

某君之演說

記 者

● 時 評

○關於最近日情之談判(漢民)怪哉上海各報師之
惡聞出洋五大臣(思黃)○清政府與華工權利問題
(漢民)○陳金邦平(過庭)○今日世分省界之日
耶(思黃)

● 譯 載

○進步與貧乏之關係

來 稿

○致公堂重訂新章要義(雲金也)○周啓然傳(上
海)○周啓辛(鍾事略(湖南))

● 告 白

君 武

世界第一之民族主義大偉人黃帝



(中國民族開創之始)

じつさい、オリエントの農業文明の長い歴史の基礎のう
えには、すでに早くから緻密に組織化され、高度に制度化
された民族国家体制と国家意識が樹立されていた。一九〇
五年、中国民主革命の先駆者である孫中山は同盟会を建設
し、日本の東京で創刊した同盟会の会報『民報』の第一期
第一頁に「中国民族開國の始祖、世界最初の民族主義の偉
人である黄帝」の画像を印刷(上図参照)、黄帝紀元を西
曆前二六九八年と推定し、一九〇五年現在を中国開國紀元
四六九四年であるととした。まさにそうした理由によって、
ヨーロッパ資本主義列強が全世界にむかって拡大し、地球
大に植民地体系を建設するや、それはオリエントではじめ
て最も頑強な抵抗に遭遇したのである。しかも東アジアの
国家と地域は、まさにこうした強烈な民族意識と集団精神
にもとづいてはじめて、パワーを集中してヨーロッパの先
進国家との競争から台頭し、今日のような多元的に併存す
る世界発展の局面をつくりだすことができたのだし、また
その発展の趨勢からして、東アジアの発展は勃興の上昇期
にあり、更なる潜在力とパワーを備えているのだ。

しかしながら、東アジアの伝統文明が自給自足の小家庭
の農業自然経済のうえに樹立されたがゆえに、狭小な小家
庭の生産単位や、分散・希薄化した労働力と物資力は、科
学技術の発展を制限した。農耕・手工業が補完した小家庭
のミクロな自給自足経済と、莫大な資源・物資が補完して

成立したマクロな自給自足の経済が共同で構成する二重の自給自足体制は、さらに商品経済の発展を制限し、社会化された生産の拡大や国家貿易の発展を阻害した。とくにこうした基礎のうえに樹立された社会の上層建築が拡大化・緻密化・重厚化すればするほど、新しい社会経済の要素の芽ばえ成長することがますます困難になってきたのである。すくなくともこれが、東アジアの伝統文明の中核地帯に位置する中国が、長期にわたって伝統農業社会に停滞してきた根本的な内的理由である。

このため、社会経済の発展はその反対方向に動きだした。すでに中国本土で新しい活力が芽ばえ成長するのが困難である以上、唯一のはけ口は、こうした悠久の歴史の重圧のもとに枯渇し人口の重圧にあえぐ故国を離れて、新しい発展の空間と機会をもとめることであった。——すなわち、明清以来、代々の華人は生死の危険を賭して、東南アジアにむかい、アメリカにむかい、異国他郷にむかって新生面を切り開いてきたことが、これである。それがつまり、現在すでに四七〇〇万の人口に達し、二―三万億ドルの資産総額を擁して、東南アジアや世界各地に分布して注目を集めている華人経済現象にほかならない。しかも興味深いことは、かれらが故郷の地縁・血縁を離れ、海外に生存を求めて発展させているのは、依然として、悠久の歴史のなから故国で培ってきた中華文化なのである。ひとたび海外の異

国他郷にいたるや、郷土の親類をもとめて同郷会を組織、たがいの生活を扶助し、職業を紹介して、渡来したばかりの郷土の親類がすぐさま遭遇するであろう困難を援助、一応の安定を得られたなら、さらに新しい同郷の親族を故郷から受け入れるのである。概算統計によれば、東南アジアの各国には、中国の異なる地域出身の六千余りにおよぶ華人やその後裔が組織する同郷会が存在し、それらはこれまで、交通網を整え、望郷の念を慰安し、団結と援助にむけた機能を發揮してきたのである。以後、時代の変遷に応じて、そのなかから郷土宗族の色彩を帯びた投資株式会社が育つことになる。華人経済の実体は、宗族や同郷の組織した会社や企業網にもとづいて、地球規模の海外華人圏を結びつける、あの無形のネットワーク、すなわち民族文化の共同意識にほかならない。

こうした精神紐帯と創業精神によって、かれら華人は幾多の難難を乗り越え、努力奮闘を続けてきたのである。そのうえ、かれらは事業が成功した後も、郷土帰属意識と情感を捨てきれず、先祖を顕彰する業績を携えて、自ら蓄積した財産や知恵を、郷土の建設と発展に還元してきたのである。——中国の改革開放以来、国外からの投資の八〇％は華人資本に出自している。これは注目すべき突出した現象である。

以上がつまり、現代中国社会経済の発展における、オリ

エントの伝統文明に培われた民族集団精神の活き活きとした体現なのである。

だが、東アジア農業文明の発祥の地である故国で、この長く枯渇した大地を活性化させ、そうした基礎のうえに、硬化した膨大な上層建築——とりわけ社会の絶対君権主義の愚昧統治による疎外という重圧——を転覆させ、新しい躍動感、土壌の発展、それに相応しい新しい社会・政治・文化の条件を、現代化の発展にもたらそうと思えば、強烈で深刻な社会変革をおこなわないかぎり不可能である。

十九世紀以来、ヨーロッパ資本主義の挑戦を前にして、中国社会は一世紀半の紆余曲折した経済・政治・文化の各方面の大変革を経てはじめて、社会発展に対する束縛をすこしずつ取り除いてきたのである。ここでは、その複雑な歴史過程を十分に議論する時間も紙幅もない。本論文で重点的に議論したいのは、筆者が実際におこなった調査をもとに、他の学者の関連研究を参考にしながら、中国の改革開放以来、こうした集団精神が、中国社会の発展において、とりわけ農村の社会基礎という局面において再現され変遷しつつある最新の事情である。

二 中国農村家族文化の復活と

農民の社会転型期における創造

一九四九年の中華人民共和国の建設、各方面における民主改革の進行、社会の安定化は、新中国初期の社会経済の発展にとってきわめて良好な局面を切り開いた。事実、中華人民共和国の建設から五〇年代前半にいたる経済の回復と発展の速度は、空前のものであった。この期間、農民たちは農業生産において、形式と程度においてあい異なる互助合作を展開したが、これは当時の農業生産力の発展水準、農民の利益や文化水準、農民の親族同士の素朴な互助合作の伝統精神や習俗にも適応するものだった。農業生産に日夜急激な回復と発展を保証したのは、このことによる。

しかしこれに続いて、ますます「左」傾化する主観が推進した不断革命と継続革命は、魯迅がかつてのべたように、命を革め、革命を革め、革命を革めることを革め、さらにまた……といったもので、物事をその反対方向にまで進めてしまった。左傾を進めたあまり、かえって右傾の友とぶつかることになり、徹底化の程度が「底無し」にいたったため、「底無し」の穴が残るだけ」となった。無限にエスカレートする合作化運動、とりわけ一九五八年の人民公社運動を経て以後、われわれは人民公社の田野に、何千年前の

西周封建制度に存在した井田制の復活をほとんど見る思いだった。その中間には、まばらに穀物が実るだけの大地、公田があり、田畑の隅や家屋の周囲には豊かな小庭園、すなわち人民公社の構成員の自留地、私田があった。こんな現実を遊離した「一大二公」の美しい幻想を支えきることはならず、それは現実の大地に転落したのである。

一九七八年以後の中国の改革の第一歩は農村からはじまった。その体制改革の具体的な内容は、家庭を単位とする連合生産請負責任制を実行して、家庭の伝統である生産機能を回復することだった。この一歩は、人民公社の形式に高度に集団化・公有化された当時の体制よりみれば、かなり思いきった根本的な突破口であるが、より長い歴史からふり返ると、商鞅の変法以来の、小家庭を単位とした社会経済の機能を回復したものにすぎない。——歴史は千年を一サイクルとして大きな冗談を放ったのである。

ただ、中国社会の発展の時代背景や条件は畢竟おなじものではない。家庭の連合生産請負責任制を実行した後、小家庭の農家は水を得た魚のように、新たに獲得した自由を利用して、農業経済を迅速に回復、発展させることになった。こうした基礎のうえに、貧窮困苦のなかから勃興したばかりの中国農民は、最小限の資本蓄積によって、極端なときは借金によってまで、工業・商業・サービス・建築・運輸など多種多様な産業を開始させた。家庭の連合

生産請負責任制の推進に踵を接して、改革開放以来の八〇年代中期に中国農村において急速な発展を開始した郷鎮企業こそ、それにほかならず、中国農民が根本から自己の社会・経済地位を改革した第二の創業であった。まさに、中国農民の偉大な創造である。いうならば、中国という農村・農民・農業を基礎とし主体とした社会経済システムを改革する、空前絶後の根本的な革命——中国農村の産業革命が、それであった。

中国国家統計局の発表した数字によれば、一九九四年末の中国農村の郷鎮企業の生産高はすでに四兆二六〇〇億元人民幣に達している。そのうち、工業生産高は三兆二二六六億で、全国工業総生産高の四二%をしめ、本世紀末には郷鎮工業の総生産高と都市工業の総生産高は拮抗し、全国工業総生産高の半分をしめることが予想される。現在、農村の郷鎮企業の総生産高はすでに農業・林業・牧畜・漁業の総生産高の三倍である。

一九九四年末の全国郷鎮企業の総数は二五〇〇万であり、一億二〇〇万人の職員を擁し、各企業の平均人員は四・八人であり、中国の伝統的な五人家族という家庭規模に近い（中国で現存する最初期の全国人口統計によれば、漢の平帝元年〔西暦二年〕の全国平均各戸人口は四・八七人である）。しかし、企業において職員とされるのは成年労働者か管理者である。企業の構成員は単一の家庭構成員

とはかぎらないが、多くの初級小企業は家庭の成員が親友であることが多く、経営管理方式も多くのはあい家族式の管理方式である。

ほかならぬ連合生産請負をおこなう農家と、このように分散した小規模の郷鎮企業において、伝統的な家庭生産経営の機能と家族文化がきわめて順調に復活できたのである。郷鎮企業があつてはじめて、伝統的な農耕と手工業が補完した農業生産の機能を、商品化と專業化による第二次・第三次産業に移転させることができるのである。中国の改革開放以後の農村家族文化の復興に関していうなら、こうした発展段階とこうした局面の研究はすでに周知のことに属するだろう。

私がここで議論したいのは、八〇年代後期より、とくに九〇年代以来、地域にそくしていうと、おもに開放が先行し、市場経済発展の比較的早い沿海地域が、企業規模と経営管理の素質の上昇過程において、伝統的な地縁・血縁結合方式による家庭関係や経営管理、人間交流方式を、現代化した科学組織管理方式に転換し、情と理が結合した新しいタイプの管理方式と企業集団精神を形成してきたことである。

市場経済の急激な発展にともない、企業の規模、組織、管理、生産分業は日に日に拡大・細密化しており、これまでの家庭、家族、親戚社会による血縁・地縁の小さな圏内

に依存しただけでは、もはや適材適所の需要を満足させることもできなければ、責任のはっきりした理性化された管理、とくに技能と業績にもとづいて厳格に報酬を分配する制度の執行に適應することもできなくなっている。このため、改革開放が先行し、郷鎮企業の発展が比較的早く、企業規模と経営管理の水準の上昇がかなりの程度になつてはじめて、職員募集（管理人員を含む）において、これまでの地縁・血縁圏内を突破して、能力主義を基準とした募集方法によって、合理化された科学管理を進めることが現れてきたのである。同時にまた、職員の世界や労資関係において、企業を家庭とする相互恩顧にもとづく情感をつくりあげて、職員を結集させ事業を発展させようという努力がなされている。地縁・血縁の家庭感情の文化からこんな風に転換して、地縁・血縁関係を脱却、ときにはそれを故意に排除しながら、理性化した科学管理と結びついて形成された企業管理文化を、われわれは簡潔かつ正確に「合情合理」の四字に概括できる。

地縁・血縁化を否定し、理性化された「合情合理」へと転換した、こうした企業経営管理の新しい文化は、中国の伝統的な家族文化が新しい条件のもとで変化・発展してきた産物であり、また、ヨーロッパ理性主義的管理モデルを中国に導入して、中国化の過程のなかで中国伝統文化と結合させた産物である。いい換えれば、民族性と現代性を兼

ね備えたそれら企業集団精神は、民族の情感・文化の現代化への転換であり、かつ現代性の民族化なのだ。

そうした発展過程は、まず八〇年代の中期に珠江デルタ地帯に現れ、改革開放と市場経済の発展と上昇が比較的に沿海地域で、今まさに急速に広がっている。

以下では、筆者が自ら調査した福建省廈門市集美区灌口鎮上塘村下村社の農村私営企業、建昌セメント製品工場を例に、そうした経営管理モデルと企業文化の具体的な現れをみてみたい。

工場長は張明昌、男、一九五三年生まれ、現在四十三歳で、本籍は福建惠安県。小学校卒業以前に出稼ぎを開始し、現在でも一般の簡単な応用文を読み書く程度の水準しかもっていない。だが大変な苦勞をして、きわめて有能であり、事業に対して絶大な自信をもっている。かれは二百キロメートルあまり先の惠安から集美にやつてきて、アルバイトをするなかからわずかの資本を蓄え、これに借金を加えて、このセメント製造工場を建設した。最初につくったのは普通のセメント版（建築物件）である。集美には、花崗岩を建築住宅に用いる伝統がある。現在、蓄財した農民は新居を大々的に建築し、花崗岩に対する需要は日益しに盛んになっていく。かれはこの市場に狙いを定め、実践において深く心をめぐらし、花崗岩そっくりの人工石の発明に成功した。質量は花崗岩と大差なく、しかも製造コストが低い。

から、価格は半分近くですむ。今かれはまた資本百万元を上塘村に投じて土地を購入、工場を新築して、設備を買いそろえた。さらに、上海の同済大学の卒業生を雇用して管理を担当させ、四川省、江西省、江蘇省などの外地から職工を十人あまり募集した（近々三十人に発展させる計画である）。私たちは今年五月四日、この建昌セメント製造工場を訪問し、まさに新製品が出荷まぎわで、工場長から管理人員、労働者にいたるまで上を下への多忙な光景を目撃した。工場長は自信に満ちてこう肯定する。市場投資にはまったくリスクがない、と。かれはまず、この人工花崗岩を用いて豪華な一軒の住宅を建設して、住宅モデルにしたと考えている。かれによれば、農民の判断は実際的であり、製品の価値をよく了解し、一見して直ちに物品を購入する、製品の圧力強度などの技術的な鑑定をする必要はない。

かれはきわめてはっきりとこうのべる。自分の郷里を避けて、この土地で工場を建設・投資し、外地の職工しか募集しない理由はこうである。①郷土の親友には、技術を理解し管理に明るい適材を求め難い。②親族や親友は面子を度外視して白黒をつけにくく、管理しにくい。③かれによれば、最も重要なのは、郷土の知人に対して技術上の機密を保持することがほとんどできないことである。この人工花崗岩は、かれののべるところでは、自己の独創品である。

かれは職工との契約をこう規定している。技術を外部に漏洩してはならない。契約の期間は最低三年で、契約期間内は、別の工場と同じ仕事をしてはならない。三年以前に退職したり技術を漏洩すれば、一万元以上の賠償金か技術訓練費を課す。なぜ三年なのか。かれは得意満面の笑みを浮かべながら、こういった。「三年後には、私は資本を回収しおわり、もつと新しい商品に取り替える準備も整っている。私の古い商品を模倣する者がいても、それで充分に元を取ったうえ、新しい商品を売り出しているから、どれだけ模倣しても私には追いつけないよ」。

職工が安心して仕事にはげめるように、かれは当地の地縁・血縁関係を避けて、かれの役に立つような新しい企業家庭の雰囲気と、外から来た職工同士との地縁・親縁の結びつきを企業のなかにつくりだして、これら職工を結びつけようとした。その具体的な措置は、おもにつきの三つである。第一に、外地でアルバイトをしたかれ自身の辛い経験によって職工の心を押し量り、まず工場区域内に、外地の出稼ぎ夫婦の衣食住の實際を解決できる簡易住宅と共同調理場を建設した。こうすれば、若い夫婦ともにかれの工場でアルバイトができ、精神的にも安定して、多くの蓄財が可能となる。私が直接アルバイトの職工にたずねたところ、衣食住費をのぞいて夫婦二人が毎月貯蓄できる純額は、一般に二千元以上であった。四川省の大竹といった貧

困山地からきた農民からすれば、こうした収入が望外の喜びであることはいうまでもない。かれらが口をそろえて「工場長は太っ腹の好人物」とほめるのに不思議はない。経済がやや発達した江蘇省の宜興からきた老調理師もまた、この張社長の仁政をたたえていた。かれの二つ目のやり方は、賃金とボーナスにおいて、日本で実行されてきたものに似た年功序列制を採用していることである。しかも、かれの工場での職歴が長いほど、月額賃金とボーナスは累進的にアップするので、職工たちはこの工場でのアルバイトの年数の増加をとて重視している。かれの第三の方法は、中国の古代にすでに存在した連帯保証制である。つまり、こうして遠い道のりをやってきた職工の多くは、外地の同郷の親友であり、互いの推薦できたのである。かれはこうした関係を利用して、工場入社にあたって、協同契約形式によって連帯保証関係にあることを署名し、たがいに約束を交わすのだが、これは華人が海外の同郷宗族と結成する小規模な同郷会での連帯保証の親類関係に似ている。工場外での縁を絶つても、工場内での縁はつながっている、とでもいうべきだろうか。職工の「家」と「同郷会」がこうしてスムーズに工場内に入り込み、かれらは遠く離れた家人の懸念や夫婦の愛情、同郷の誼みをすべて、この他郷の工場という家に託すのである。冷酷無情な契約は、温かい情感という潤滑油をつうじて実現され、雇用者は心から工場

のために尽くそうと思ひ、途中で「鞍替え」する考えなどはまったく消えてしまふ。過去の内外の資本主義の発展史において、とくに資本の原蓄過程において常にみられた労資間の利益の衝突と怨念は、これによって解消されるのである。

広範な調査によつて知りうるのは、地縁・血縁の雇用関係のそうした回避は、たんに建昌工場のような、ある時期に技術の機密の実行を必要とする工場に現れるばかりではないことだ。伝統農業において、過去の先祖先代は農繁期において相互に援助し合作する習俗を培つてきた。当時の相互援助と職工輪番は親族親友のあいだで進められたにすぎなかつたが、近年、地縁・血縁関係を回避することへの転換が起こつている。稲作專業農家の職工の多くには、外地の季節出稼ぎの農民が雇われており、かれらの賃金は当地の者よりも低く、時間制あるいは物件ごとの支払いであり、労資関係は賃金と切り離されている。私営経済の発展が比較的早く、国内生産の総額に当地のしめる率がかかなり高い閩南地域にみられる伝統家族文化の変化の情況が、これであり、浙江南部の温州地域に最も普遍的にみられる。中国は地域が广大で人口が多く、各地の経済発展の水準と経済システムは千差万別である（産業システムからみても所有制システムからみても）。ただ全体としてみるなら、現在は依然として公有（国有と集団所有）制が経済の主要

な要素をしめている。改革や市場経済の発展と、所有制システムの分化は、相互に依存する多元的な所有権の主体をつくりだした。郷鎮企業の発展は農村であり、とくに経済の基礎がもともと良好で、元人民公社の社隊企業が保存されて発展した江蘇省（主に江蘇南部）、広東省（主に珠江デルタ地帯）、山東省（主に膠州湾東部）などの沿海地域において、集団経済（主に郷鎮企業）はまさに雨後の筍のごとく急激な発展をとげている。

所有制のシステムにおいて最も発展しているのは、個人、集団、国有及び外国法人などが共同で保有する混合型企業である。広東省深圳市宝安県万豊村の共産党支部書記の潘恩強は、こうした多元的な経済要素をもつた連合体に「共有制」という名をあたえている。

そうした「共有制」の基礎とさきずなは土地である（土地は公有に属し、個人農家が請負経営をおこなうものだが、市場経済の発展にともない、とくにその株式合作制度の推進によつて、土地は産業要素の基本となり、さらに会社企業のみならず株式化されるものとなつた）。改革開放以後も保存され発展してきた元人民公社の社隊企業や現郷鎮企業、さらには上にのべたその他の各種要素の経済結合によつて、集団は、土地資源と各種企業を擁する経済実体、すなわち総合的企業となつた。そして、その内部の各具体的企業の所有権形式もまた多種多様化された。すなわち、

個人家庭式の企業。集団が所有し個人あるいは複数人が連合で経営を請け負う企業。集団の独資で幹部が経営管理する企業。個人が経営し、所有権は個人、集団、国有企業とその他の外国企業法人が共同で保有する混合型企業などである。スタイルはこのように多様であるが、所有権、利潤使用、分益などの経済関係ははっきりしている。さらに人民公社時代のあの「親方日の丸」の混乱がないのが、日々勃興する現代企業の特徴である。郷鎮企業の漸次の拡大にともない、当該村、当該郷、当該地域の諸制限がその発展を束縛しているとき、富裕地域の豊富な集団資金は近隣の都市・郷鎮にむかいはじめ、つぎに中西部地域に流動し、さらには国外にむかつて産業を發展させているのである。農業、工業、商業、生産、流通、サービスはますます一体化・社会化し、郷村社会の組織全体により確実な経済基盤を提供しているのである。

こうした「共有制」の社会組織の基本単位は、上にのべた経済基盤のうえに建設され、政府を中核とし指導とする行政システムが社会集団を統合している社区である。現在の条件では、こうした社会組織システムのなかで、伝統的な血縁家族関係はすでに希薄なものとなり、人民公社時代の政社合一といった自治性なき生産隊や生産大隊とは異なったものとなっている。だが歴史的な流れからすれば、合作化と人民公社時期に形成された自然的で行政的な村落を

境界にもち、村民の私有財産をふくむ合法的な権利の承認と保護を前提とし、村民と集団の土地やその他の集団財産をきずなとした、地域性の特徴を備えた利益集団なのである。共同利益と一体化経済の不断の發展によって、こうした社会組織全体の基礎、内実、力量は不断に拡がり、豊かに、強固となっているのである。

「公有制」の集団経済のこうした基盤と社区の生活において、幾千年にわたって伝承された家族感情と団体意識(学者が常に説く旧伝統意識)と、共和国成立後の十数年にわたる合作化・人民公社化・社会主義教育過程のなかで形成された合作観念と集団への帰属・依頼感(わが国の学者が常に説く、解放後から改革開放前の約三十年間における、社会主義改造・建設やイデオロギー注入によって形成された新伝統)もまた、こうした個人の権利を承認し、集団経済の發展に協力し、共同で富裕化する基礎とコースのうえに、融合重疊し、複合發展したスタイルをもって再現してきたものであり、合作の団体精神、集団保障の意識、より広い大家庭の観念への帰属観や依頼感となって表現されている。

こうした社会経済システムでは、組織システムはますます制度化され、ますます理性化の要因と融合するようになる。郷村の市場経済の勃興、人間関係の民主化・平等化と科学的管理の建設・健全化、市場の交流における人間交流、

とくに金銭関係上で見知らぬ人間同士の「その場でけりをつけること」を行動基準とすることが、しだいに広がり強まり、鄉村社区の知人社会においてもそれが基準とされ、さらには家庭構成員のあいだにもますます「実の兄弟でも金銭は他人」が明白となつて、——人と人との感情や金銭関係がますます分離されてくるのである。管理と経済関係において曖昧な点を残さない。これこそ、まさに市場経済の趨勢が成熟しつつある象徴である。こうした社会・経済・文化現象は、改革開放と郷鎮企業発展が一步先行した沿海地域においてまさに成長してきたものである。発展の波が、中部・西部地域に漸次向かうにつれて、湖南省、安徽省、江西省といった近年、郷鎮企業がしだいに勃興している中部の各省においても、すでにそうした端緒はみえはじめているのである。

中国の社会学者、王穎は、調査研究をつうじて、そうした「共有制」の経済基礎のうえに建設された社会・経済・文化現象に名称をあたえ、それを「新集団主義」と名づけて、こう定義した。「新集団主義とは個人の利益を基礎とし、共同の富裕化を目標に樹立されたもので、合作意識、公私兼備の関係モデルや、集団を単位とする社会組織を備えた方式である」^①。この定義は、農民が創造したこれら発展モデルのおもな内容を正確に概括している。ただし「新」と「旧」は主に時代順序を表す概念で、物事は日々新たになり、

時間の推移とともに「新」は旧に転換するであろうから、もし真の内容である特徴を表すとすれば、社会転換の実践過程における中国農民のそうした創造を、公私を兼ね備え、情理を結合し、共同で富裕化するような社会・経済・文化の総合発展モデルと称する方が、私見によれば名称としてより適切であろう。

こうした新しい時代と新しい条件において、新旧の二つの伝統から変遷してきた社会・経済・文化の構造は、公と私、ミクロとマクロ、伝統と現代、民族性と世界性の弁証法的な統一を生き活きと体现してきた。それはまた、中国の国家指導者や中国内外の研究者たちが中国の特色を持った社会現代化の発展コースを探究するうえで、とりわけオリエントの伝統文化と現代の社会発展の関係とその未来を研究・討論し展望するうえで、最も現実的な啓示——すなわち、中国伝統文化の社会転換期における創造——であろう。

注

① 「わが国で発見された世界最古の栽培稲」『新民晚报』

一九九六年一月一五日。

② 『而已集・小雑感』『鲁迅全集』第二卷、第五三三頁、

人民文学出版社、一九八一年版。

③ 『偽自由書・透度』『鲁迅全集』第五卷、第一〇三頁、

人民文学出版社、一九八一年版。

〈4〉 潘恩強「共有制は最も適切な選択である」(一九九一年「万豊モデル」討論会文件「広東省万豊村の社会発展」『社会学研究』雑誌、一九九六年第四期)を参照。

〈5〉 王穎『新集団主義——郷村社会の再組織』经济管理出版社、一九九六年版、第一九七頁。

(邦訳 緒形 康)